

琉球弧世界遺産学会（通称：琉球弧世界遺産フォーラム）設立

沖縄の世界文化遺産は既に 2000 年に登録され、近い将来に奄美・琉球の自然も世界遺産に登録されようとしています。我々はこれまで研究会を開き講演会や大学への講師派遣を続けてきました。今年からは世界遺産アカデミーの協力を得て、検定試験も県内・県外各地で実施予定です。調査・研究のほか知識普及を図るため学会を発足することと致しました。

目的

本フォーラムは、世界遺産条約の趣旨に賛同し、琉球弧における世界遺産及び地域の文化・自然資産の保全と活用を図り、これらを将来世代に継承するため、多様な主体の参加による総合的な普及啓発の推進に資することを目的とする。

主たる事業

- ★講演会、研究集会、フィールドツアー等の開催
- ★研究集会成果報告、ニュースレター、その他の出版物の刊行
- ★内外の関係団体との交流、小中高校、大学や公民館等の社会教育施設への講師派遣
- ★調査研究および資料収集事業
- ★その他本フォーラムの目的を達成するために必要な事業

当面の活動

- ★定例研究会開催
- ★講演会・シンポジウムの開催
- ★ウェブマガジンの定期的発行

設立総会

2014年5月24日(土) (予定)

連絡先メールアドレス

ryusefo@gmail.com

2014年3月30日付 琉球新報
設立発表記者会見を行いました。



平成26年度「奄美・琉球世界遺産検定」「沖縄歴史検定」実施

「奄美・琉球世界遺産検定」「沖縄歴史検定」を実施します。

これまで、両検定は NPO 法人アジアクラブが主体となって運営していましたが、今年度より当フォーラムで実施することになりました。

昨年同様、事前講習も予定しています。詳細は本誌4月号、6月号、8月号でお知らせします。

■奄美・琉球世界遺産検定

【日時】9月21日(日)

【場所】東京、大阪、奄美大島名瀬市、名護市(名桜大学)、那覇市(沖縄大学)、石垣市(石垣ケーブルテレビ)の6か所。

■沖縄歴史検定

【日時】9月21日(日)

【場所】東京、大阪、名護市(名桜大学)、那覇市(沖縄大学)、石垣市(石垣ケーブルテレビ)の5か所。

琉球弧世界遺産学会設立おめでとうございます。

琉球弧における世界遺産及び地域の文化・自然遺産の保全と活用を図り、これらを将来世代に継承するため、多様な主体の参加による総合的な普及啓発の推進に資することを目的とされており、これらを通じて琉球弧には様々な島があり、素晴らしい自然があり、また、そこで暮らしておられる方々の生活・文化・風習なども非常に多様なようなので、その中から日本には未だない複合遺産が出てくる可能性があるのではと大いに期待しております。私ども世界遺産クラブは特定非営利活動法人が主催する世界遺産検定を受験された首都圏の方々を中心に組織した有志の集まりで登録会員は約70名おります。世界遺産の学習を通じて幅広い視点から世界遺産への理解を深め、世界遺産の保全と継承並びに地球環境への貢献の意識の輪を広げてゆきたいという思いで活動を続けてきました。定期的な活動として3ヶ月に一度例会を開いて会員に輪番で90分の発表してもらっています。皆さん世界遺産には一言ある方ばかりなので非常に面白いです。また、年に3回程度大使館でのセミナーを開催しています。これは大使館の方にその国の文化などを含めた世界遺産についてのお話を伺っております。今年には既に1月にアルジェリア大使館でのセミナーを実施しました。また、定期的ではありませんが1泊2日の研修旅行を行っています。平成の大修理が行われている日光の社寺を日光文化財保存会の特別の計らいで見学させていただき、屋外にある文化遺産は風雨などにより劣化が激しく保存・保全にいろいろな方々が努力されていることがよくわかりました。自然遺産では白神山地へ2泊3日の日程で訪問しました。普段は入れないような場所に入りクマゲラの巣をみたりして自然の素晴らしさを堪能しました。ここでも自然遺産保全のためにいろいろな対策をとっておられることがよくわかりました。白神山地へは今年も参加者を募って訪問する予定です。これらの研修旅行で学んだことは、学校や行政が主催する世界遺産講座などに講師として出向いた機会をとらえて世界遺産の保全の大切さを話しています。以上、当クラブの活動を簡単にご紹介させていただきました。私は、世界遺産の「琉球王国のグスク及び関連遺産群」は勿論ですが、琉球諸島の豊かで多様な文化をもっと知りたいと思っております。その意味で貴学会からいろいろ勉強させていただき、私どものクラブの知識を広げ、できれば何らかのお役に立てればと思っております。どうぞ、よろしくお願いたします。

世界遺産クラブ
代表 小六 克介

Information

NPO 法人世界遺産検定が発行するメールマガジン【せかけん mail】
2014.4.4/Vol.180 よりご紹介します。

▼3月28日に世界遺産検定が文部科学省の後援事業として認可されました。検定を通して世界遺産の価値や保全の重要性について広く啓蒙活動を続けてきた実績や、検定事業の質の向上と信頼性の確保に向けて積み上げてきた努力が認められたものと受け止めています。

受検者の皆様、後援・運営関係の皆様等、これまで世界遺産検定を支援してくださった多くの皆様に心より感謝いたします。今回の後援を新たなステップとして、世界遺産検定が生涯学習社会・国際社会に寄与できる、公益性の高い事業としてさらなる充実を図っていけるよう、これからもさまざまな取り組みを積極的に進めていきたいと考えております。今後とも何卒ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

・
・
・

The screenshot shows the website for the 16th World Heritage Examination. The main banner features a camel and the text '第16回 世界遺産検定 2014年 7月6日(日) 各都市で開催!'. Below the banner, there is a section for '検定お申込受付中' (Registration Open) with dates: '3月17日(月)～6月9日(日) 18:00まで' for internet applications and '3月17日(月)～6月2日(月)' for on-site applications. The website also includes navigation menus for '世界遺産検定について', '受験のメリット', '合格の要件', '実施要項', '検定の教材', '対策講座', and '団体受験'.

NPO 法人世界遺産検定
<http://www.sekaken.jp/>

触れる世界遺産とオモロの世界

高良 勉

140329

私は、NPOアジアクラブの主催する文化講座「現地巡検で知る沖縄の歴史・自然と世界遺産」の第1回講座「現地で触れる、オモロに謡われた世界遺産」の講師として、2013(平成25)年12月7日に10人の参加者を案内・講義してきた。

周知のように、琉球弧の古典『おもろさうし』は全22巻で1554首のオモロ＝神謡から成る。その第1巻は尚清王代の1531年に収集・編纂された。少なくとも、今から450年以上前からオモロは謡われ、祈られ踊られてきた。

この全22巻のオモロ群には、首里城跡や中城城跡、勝連城跡を始めとするグスクや斎場御獄等の世界遺産を謡ったオモロが多数ある。それらの中から今回は、首里城跡、今帰仁城跡、座喜味城跡に関連するオモロを選び案内した。

今回の講座に当たって、私は次のようなポイントと目標を立てて臨んだ。まず、参加者にオモロと『おもろさうし』の基本的知識を学んでもらうこと。すなわち、『おもろさうし』の編集時代や、収録されたオモロの総数、巻数等を学んでもらった。

第二に、オモロを読むときの基本である「一」と「又」という記号の意味を理解すること。それによって、オモロ一篇一篇の歌の構造＝歌型が分かるようになること。

以上をふまえて、まず『おもろさうし』第1巻の1番目のオモロをぜひ読んでもらいたかった。それは、有名な次のオモロである。

あおりやへが節
一聞得大君ぎや
降れて 遊びよわれば
天が下
平らげて ちよわれ
又鳴響む精高子が
又首里杜ぐすく
又真玉杜ぐすく
(巻1の1)



私は、第三に首里城跡、今帰仁城跡、座喜味城跡の現場で、その世界遺産としての歴史と価値を説明すると同時に、全参加者にオモロを声に出して朗読してもらうことにした。古典や古代歌謡を身近に感じ、深く理解するためには実際に歌ってみるか声に出して朗読した方がいい。しかし、初心者にとっていきなりオモロを歌うことは難しい。そこで、朗読してもらうことにしたのである。

世界遺産の現場で、関連するオモロを朗読するという事例は、そんなに多くはないだろう。実は、私も今回が初めての経験であった。それ故、私も真剣にオモロを学び直し、朗読しやすい神謡を選んでいった。

一聞ぬ今帰仁に
大神酒の満ち上がるぐすく
又鳴響む今帰仁に
(巻17の25)

このようにして、私たちは首里城跡で三首、今帰仁城跡で三首、座喜味城跡で二首のオモロを朗読して楽しく学んだのである。



〈講座 現地巡見で知る沖縄の歴史・自然と世界遺産〉
現地で触れる、オモロに謡われた世界遺産

平成 25 年 1 月 27 日
池宮 照子

冬晴れ、那覇の最高気温は 22 度、最低気温が 16 度の予報であった。講師の高良勉氏、アジアクラブの仲宗根、記録者の池宮を含む総勢 11 人の乗車を確認後、予定より 15 分遅れて 9 時 15 分にアジアクラブを出発し、首里城へ向かった。首里城公園管理センター向かいで下車し、徒歩で守礼門、歓会門、瑞泉門、漏刻門、広福門をくぐり、首里森御嶽のある首里城下之御庭に至る。早朝にも関わらず、観光客がひっきりなしに正殿に続く奉神門へ吸い込まれていく。どうやら修学旅行のシーズンであるらしく、いたるところに制服姿の若者たちの姿が見受けられた。

首里森御嶽は、奉神門に向ってやや右寄りに位置し、ガジュマルとクロツグがヤージョー（屋門）のある石垣囲いの外に樹冠を広げていた。ここで高良氏より『おもろさうし』について簡単な説明があった。

首里森御嶽は、城内 10 か所にある拝所の中でも、真玉森御嶽とともに最も神聖視された御嶽で、『おもろさうし』にも数多く詠まれているとのこと。真玉森御嶽には足を運ばなかったが、下之御庭に巡らした城壁の外、首里森御嶽の西方、と城内の案内図に記されていた。

観光客が続々訪れる下之御庭を後にして、今回の講座名にもなっている、実際にオモロが謡われ踊られた現地でオモロを謡うという体験を、歓会門手前の城壁沿いで実施した。

参加者全員で「あおりやえが節」を朗唱する。

謡い方については、表記の通りに謡うことが、現在のところオモロ学者の間で統一の見解になっているということで、すこしぎこちない感はあるが表記どおりに謡われた。城壁ごとに、更地になった中城御殿跡を見おろす場所で、高良氏の後に続き、1 フレーズずつ声に出していると、かつて神女たちが祈りとして謡った「オモロ」が確かにこの地で謡われたのだ、という手ごたえを感じた。

首里城を後にし、バスで沖縄自動車道を北上する。途中伊芸サービス・エリアで休憩の後、一路今帰仁へ。車中で、高良氏が紹介した資料によれば、首里城、浦添グスク、今帰仁グスクの規模はほぼ同じで、他のグスクを圧倒しているとのことであった。

今帰仁城跡到着。丘陵の高みへと幾重にも重なる城壁は優美で、車中での話を裏付ける雄大な景である。世界遺産登録後の発掘調査により、かつて駐車場であったところにも外郭がみつき、リズムカルなカーブを描く城壁が復元されていた。

グスク交流センターで昼食の後、「今帰仁グスクを学ぶ会」のボランティア・ガイドである大城氏の先導で今帰仁城跡を歩く。かつてあった正面の鳥居は撤去されていた。平郎門から入って、右手の旧道へ入る。曲がりくねった、大小さまざまな石が敷かれた道は歩きやすいとは言えず、道幅も狭く、急な坂になっているのは防衛機能上のものだとのこと。平郎門からまっすぐに延びた石段は、戦前に参道として整備されたものである。ここでも修学旅行の学生たちの集団を見かけた。

グスクの東には志慶真川が海へ向かって流れており、一帯は天然の良港として今帰仁城の繁栄を支えたとされる。15 世紀初頭に中山により攻め落とされ、以後、中山より派遣された中山監守の居城となるが、地元ボランティア・ガイドの語りは、中山によって滅ぼされた今帰仁城の主、北山王の無念を伝えていた。今帰仁城跡で高良氏が紹介したオモロは「なごさかいが節」「あおりやへ節」「あおりやへが節」である。

高良氏の後に続いて謡いながら、この地の栄枯盛衰を思うと、言葉が祈りのように立ち上り、そして空へと消えていく。なるほど、オモロは祈りの言葉であった。

本日のバスツアーの初めに、高良氏が「これまで、世界遺産に登録された場所で、その地に立ってオモロを謡う、という試みがなされた、ということを知ることがない。今回が初めての試みだと思うので、みなさんもぜひ感想を聞かせてほしい」と語られた。オモロは難解であるが、私たちの先祖が言葉にしたものであり、その言葉の持つ力を感じた。

眼下に志慶真川、北に東シナ海を望む御内原（ウーチバル）の城壁の際で、オモロの朗唱の後、高良氏の詩、「今帰仁城跡」が朗読された。

14 時 30 分、今帰仁城跡を出発し、読谷村の座喜味城跡に向けて国道 58 号を南下した。バスに揺られて約 90 分。

入り口から城跡までの道の左右は松林で、かっこうの散歩道である。やがて松林を抜けると、二の郭が姿を現す。ここでも修学旅行生の一団に遭遇した。

二の郭のアーチ門をくぐる前に、アーチ石のかみ合う部分、アーチ中央部分にくさび石がはめられていることを教えられ、一同、頭上を仰ぐ。また、入口付近に石の香炉がいくつも無造作に並べられていることに触れ、沖縄戦で、座喜味城跡は日本軍の高射砲陣地として利用されたとのこと。その際、城内から運び出されたものだという。どこにどうあったのか、不明なため、そのままになっているようだ。世界遺産に登録された城跡にも、戦争の痕跡が如実にあることに複雑な思いを抱いた。戦後の一時期、米軍のレーダー基地もここに建設されたという。

座喜味城跡は、中山が今帰仁城を攻め落としたりと、北への守りとして護佐丸に築城させたと言われている。その護佐丸は 1440 年に中城城へ居を移すが、その後も、この地で盛んに海外貿易が行われたことが、16 世紀の中国製陶磁器の出土などからうかがえるとのこと。規模においては首里城跡や今帰仁城跡に及ばないが、その石積み的美しさは特筆に値する。

座喜味城跡での朗唱は、城壁の上で行われた。あいにく霧がかかっていたが、晴れた日には、南東に中城城跡が、北に本部半島が望めるという。

以上、首里城跡、今帰仁城跡、座喜味城跡とめぐり、オモロを通じて、これらの城跡の世界遺産としての魅力に触れることができた。

スペインの世界遺産 メリダの考古遺産群

五藤 克己（元文化放送記者）

メリダはスペインの西部、ポルトガルと国境を接するエストレマドゥーラ州にあります。

紀元前 25 年にローマ帝国の属州ルシタニアの州都として建設されました。そして今でも古代ローマの遺跡が随所に残る街です。その一部を紹介しましょう。

紀元前 8 年建造の円形闘技場の収容人数は 1 万 4 千人です。遺跡内は自由に見て回れるので、観客席からも、闘技場からも、当時の様子を思い描くことができます。剣闘士同士、猛獣同士、人間と猛獣との戦いなどが繰り広げられたと言います。

すぐ隣に建つローマ劇場は紀元前 24 年、アウグストゥス帝の娘婿アグリッパによって築かれ、6 千人を収容できます。現在でも古典演劇フェスティバルが開催されるなど、現役の劇場でもあります。僕が行ったときは、たまたま現代音楽のコンサートの準備をしていて、その音響効果の良さを実際に知らされました。舞台から観客席を見上げると、観客席が思いのほか近く感じられます。観客のどよめきすら聴こえてくるようです。舞台の後方には 32 本の大理石の柱が神殿風に立ち並び、往時はさらにその後方に神殿があったということで、その柱列なども残っています。



(ローマ劇場)

円形闘技場もローマ劇場も、遺跡としての崩れ具合と残り具合が絶妙です。

今見る光景から少し想像力を巡らせて、往時の華やかさを思い描くという贅沢な遊びに浸れます。

さらにスケールの大きな遺跡として、競馬場があります。収容人員は 3 万人。

入口の事務棟でCGの解説映画を見たあと実際に見て回ったので、まさに映画「ベン・ハー」の世界をイメージできます。競馬場の地面には、小さなタンポポが一面に咲き競っていました。競馬場のすぐ横からサン・ラサロ水道橋が伸びています。実用性に裏打ちされたその機能美には、唸られます。古代ローマの土木技術の高さの証でしょう。

(サン・ラサロ水道橋)

メリダにはもう一つ、ロス・ミラグロス水道橋もあり、遺跡としてはまた趣の違う味わいがあります。グアディアナ川に架かるローマ橋は、17 世紀に修復されたものですが、橋桁の一部にはローマ時代のものが利用されています。全長は 792m、もちろん現役の橋ですが、歩行者、自転車の専用で車の乗り入れは禁止。市民の憩いの遊歩道となりました。



(ローマ橋)

メリダは古代ローマ帝国では、西の果てともいえる境界の地です。その境界の一都市にすら、これだけの遺跡を残す古代ローマの偉大さを、改めて知らされました。

緒方修の世界遺産紀行

緒方 修（おがた・おさむ） 1946年3月熊本生まれ。文化放送を経て、
沖縄大学教授（現・客員教授）。NPO法人アジアクラブ理事長。ICOMOS 会員。



沖縄・巡礼の道

巡礼といえば一番有名なのは四国八十八カ所巡りだ。菅笠に白装束のお遍路さんが歩いて 88 カ所を廻る。江戸時代から続いているのだが、この格好は実はそんなに古いものではなく、戦後になって始まったと言われている。地元のバス会社がバスツアーを企画し、それから大勢の人々が「四国遍路」を意識し始めた。もともと空海が四国を巡って悟りを開いた。そのゆかりの地を巡るのが、他の巡礼地と違うのは、最終目的地がないことだ。モン・サン・ミッシェル（フランス）でお祈りする、サンチャゴ・デ・コンポステーラ（スペイン）まで辿りつく、という目標到達型ではない。円環型なのだ。1400 キロの道を歩き通すことに意味がある。それも毎年、少しずつ進んでも良い。日本独特の考え方だろう。

沖縄では東御廻り（あがりうまーい）が最も有名な巡礼路だ。門中（むんちゅー・ファミリー）で4年に一度、バスを連ねて一巡することが多い。訪ねる場所は門中によって少しずつ違うが、琉球における稲作発祥の地とされる受水・走水（うきんじゅ・はいんじゅ）、最高の聖地・斎場御嶽（せーふあーうたき）はだいたい含まれているようだ。

沖縄の御嶽（うたき）巡りは南に東御廻り、北に今帰仁上り（なきじんぬぶい）がある。いやほかにも門中が大事にしている御嶽がそこらにあるはずだ。世界遺産でなくても、文化財でなくても村の中にひっそりとたたずむ野仏でも良い。いや石造りの小さな仏様も必要ない。沖縄には、自然界のあらゆるものに神が宿するという考えがある。大きな樹、岩、川、泉、森、木立の中の空間、すべてに祈りを捧げる。神は水平線の彼方からやってきて、海岸近くの岩に一時身をひそめ、村の様子をうかがってから各家々に入ってくる、とされる。うんけー、うーくい（ご先祖をお迎えし、お送りする）の行事は今でも盛んだ。沖縄では、絶対神がいる



琉球の墳墓、ベリイ提督『日本遠征記』より

るわけではなく祖先がそのまま崇拜の対象となる。今は新しく建てられることはないが、巨大な亀甲墓は観光客の目を驚かす。「人間は生まれた場所に還る」。その思想は、子宮に似た形態の墓を見ている

うちに納得出来る。亀甲墓こそは沖縄の人々の祖先への敬愛の念の表れ。墓の前の庭ではいまでも清明祭（しーみー）の時には、家族一同重箱を持ちよりピクニック気分を楽しむ。

中国で風水の思想そのままの村を訪ねたことがある。亀甲墓の形を村全体に拡大した輪郭の中に、家々が密集している。つまり中国・福建省の客家の円楼などと同じで、囲われた内部は一つの門中であり村なのだ。細い道が縦に走り、手前には池、奥には「くさてい（腰当）と呼ぶ半円形の低い土手があり、丸い小石で築かれていた。祖先が生まれてくる場所だという。村全体が子宮の形、そして奥には卵を思わせる石の数々。なんとこれは卵子を表しているのではないか。



世界遺産が登録される前に必ず専門家による視察がある。「琉球王国のグスクおよび関連遺産群」は、東アジア世界との交流の上ではぐくんだ文化が高く評価された。登録基準（vi）人類の歴史上の出来事や伝統、宗教、芸術など強く結び付く、をふくめ3つの基準が適用された。（vi）の内容としては「琉球王国時代の事実上の国教であった琉球神道は当時、祭政一致体制に編入されていたが、現在の沖縄においても民間信仰として定着していると評価されている。グスクの前で手を合わせおがむおばあ達の姿が強く専門家達の眼に焼きついた。沖縄の世界遺産は登録された地域だけではない。次回以降は世界遺産へ結びついた民衆の巡礼の地、東御廻り、今帰仁上り。そして世界遺産である首里城跡、今帰仁城跡、座喜味城跡、勝連城跡、中城城跡、そして関連遺産群の玉陵、園比屋武御嶽石門、識名園、斎場御嶽の9地域をシリーズでご紹介してゆきたい。